

学長 インタビュー

岡崎国立共同研究機構
機構長 伊藤 光男

世界の歴史に無い研究機構に発展

— 岡崎国立共同研究機構は、文部省所轄の大学共同利用機関の一つであると聞いております。大学共同利用機関として大学等の研究者による共同研究、連携協力はどのように行われているのですか。また岡崎国立共同研究機構の特色についてお聞かせください。

機構長 すでにご存じだとは思いますが、大学共同利用機関は今十四ございまして、この岡崎はできて二十五年になります。一番最初に「分子科学研究所」ができ、二年後に「基礎生物学研究所」そして「生理学研究所」ができました。それから数年たちまして、それらをつなぐ組織ということで、岡崎国立共同研究機構ができました。岡崎の場合、大学共同利用機関としては古いほうです。高エネルギー研などはもっと古いのですが、と言ってもまだ二十五年ですから、ある意味で「若い」とも言えます。ご承知の通り大学共同利用機関は、特に理科系に限って言いますと、戦後の著しい科学の発展にもなっていて、いろいろな新しい科学の方法論ができ、それにと

もなってきたさまざまな研究手段が非常に高度化してきました。ところが日本の戦後の苦しい状況の中で、各大学が最新の研究手段をそなえるのはなかなか難しかった。それで、最先端の研究機器を人材とともに一カ所に専門ごとに置いて、全国の大学の研究者にその設備・施設を使ってもらって、あるいは共同研究を進めて、基礎的な研究を推進しようとしてきたものです。



特に岡崎には三つの研究所があります。「分子科学研究所」は物理と化学、「基礎生物学研究所」は生物、そして「生理学研究所」は医学という分野でそれぞれ違ったリージョンで、三研究所は発当初から独立、自立というポリシーが現在まで貫かれております。この三研究所は独自の過程で発展してまいりまして、それぞれの領域で国際的な研究拠点

そういう点では本当に、世界でもユニークな研究所なわけです。

そして、少しおこがましいようですが、そういう目的がこれほど効率よく成功した例はほとんど無いと思います。岡崎もそうですが、この二十数年の間に大学共同利用機関が世界のトップをいく研究拠点に成長したというのは世界の過去の歴史の中でも無いのではないのでしょうか。

なっています。ある意味ではこの三研究所が岡崎にできたのは偶然でありまして、もとはここには愛知教育大があつて、それが移転した跡地だったのです。今にして思えば、それぞれ違う分野の三つの研究所が集まったということが、岡崎を非常にユニークな存在にしたと思います。というのは、キーワードでいいますと、「分子科学研究所」は「物質」、



伊藤 光男 機構長

昭和4年3月24日生(福岡県)
九州大学理学部化学科卒
26年5月 同 理学部助手
41年1月 東京大学物性研究所助教授
45年1月 東北大学理学部教授
平成4年3月 定年退職
5年4月 岡崎研究機構分子科学研所長
11年4月 同 機構長

「基礎生物学研究所」は「エコロジー・環境」、「生理学研究所」は「脳」です。物質・環境・脳というのは現在最も社会的関心の高いもので、それらの研究をここでやっているわけです。こういう組み合わせは非常に珍しいのです。大概の場合は似通った分野の研究が集まって、それらの融合をはかるということが行われます。ここはそうではなくそれぞれが非常に違った基礎をもっています。新しい学問を産みだすときには、必ず異質な物の間の競合と結合が行われます。同じ家族ぐるみの研究からは決して新しいものは出てこないものなのです。考え方も方法論も違う者がお互いに競い合い、主張し、また学び合うことで今までにない新しい分野が産まれるわけです。

新しい方法論で爆発的に発展する

そういう意味で、ここではそれができると

考えています。「生理学研究所」と「基礎生物学研究所」は「分子科学研究所」は「バイオサイエンス」という点では近いのですが、「分子科学研究所」はちょっと違います。しかし、バイオサイエンスも分子レベルで研究を掘りさげなければならぬ所までできている。分子科学は分子をとりあつかうわけですが、ミクロの世界の分子をとり扱うにはそれなりの方法論を開発しなければなりません。現在、これだけバイオサイエンスが発達したのは、分子を計測する新しい方法論がうまれてきたからです。例えば、脳を調べるのに生体磁気計測装置というものが使われますが、これは脳の分子から発する信号を捉えるもので、まさに分子科学から生れた新しい方法論なのです。これによって脳を開かなくても、そのままの状態で脳の内部を調べることができるようになったのです。このように一つの新しい方法論や計測法が出てくると、それはもう絶大な影響力をもち、こうしてバイオサイエンスの新しい展開がもたらされるのです。新しい方法論の開発がなければ、そういう発展はあり得ないのです。

また、古い例ですが、レントゲンがX線を発見して、その発見によっていかに医学が発展したか、われわれはよく知っています。また現

在、病院でさかんに使われているMRIなどは分子科学から産まれた計測法です。

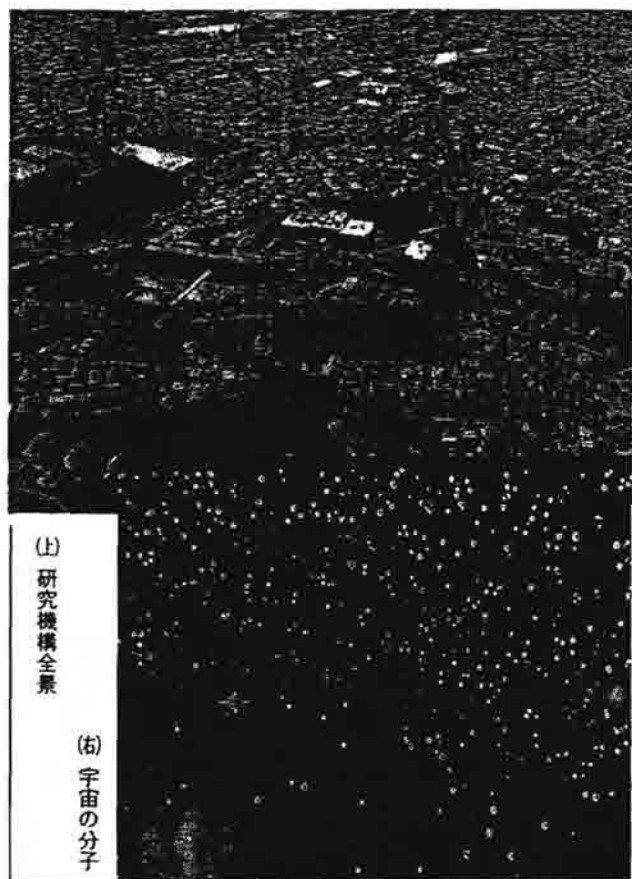
融合ではなくてケンカ姿勢で共同研究

このような新しい方法論をここでは分子科学研究所が出すことができます。そしてそれをすぐに、「基礎生物学研究所」や「生理学研究所」が受けて、それにマッチした研究对象に応用することで新しい展開が図れるのです。このように三研究所がそれぞれの特徴を発揮しながらやっつけていこうというわけです。その時に重要なのは、お互い三研究所の研究者が融合するのではなくて、むしろ喧嘩することを期待しています。

それぞれの基礎をもって、自分の主張をもっていることが一番大切だと思います。自分の専門の立場は崩さず、相手にへつらうことは絶対にしない。その上で互いに主張を戦わせ、互いに納得するまで喧々諤々することが必要です。

なあなあで終わる日本の協力関係

日本では協力関係というのは結局「なあなあ」になってしまいうわけですが、それはここでは絶対に避けたい。三つの研究所の独自性、これはしっかりと保ちたい。そうして新しいスタイルの協力関係競争関係といった方がよいかもしれませんが、そういったものをつくって、そして新しい学問の潮流をここから出



(a) 研究機構全景

(b) 宇宙の分子

していききたい、こう考えています。

幸いに、三つの研究所が同じ場所を占めているということ、おのおのの特徴を出して世界に発信していきたいと考えております。

— 大学共同利用機関では教授、助教授、助手を中心として研究が行われているとお聞きしておりますが、学術研究の推進と研究者の育成についてはいかがでしょうか。

機構長 この機構の三研究所においては、教授、助教授、助手を中心として、多くの研究員によって活発な研究が進められています。

この教官については、研究所設立以来、ユニークな人事方針をとっており、これはこの機構の大きな特色でもあります。それは全ての教官、教授・助教授・助手の採用は公募で行っています。また助手から助教授、助教授から

教授への内部昇進は実質的に禁止されています。

また分子科学研究所では助手に六年の任期を定めており、非常にシビアな人事政策をとっております。ある意味で、若い人達にとっては大変辛いところだと思えます。しかし創設以来この方針を続けてきて、おそらくここほど人事の流動性の高いところはないでしょう。

日本一だと思えます。これは、この研究環境が良い、また、大学と違って学生の教育に多くの時間をとられることなく、研究に没頭できる場所にあると思えます。このスタッフはプロモーションのためには外に出なくてはならない。外へ出るのは、日本の場合どうしても閉鎖的ですから、なかなかそう簡単ではありません。その競争に打ち勝って出ていかななくてはなりません。大学はまだ人事が閉鎖的で、外部から入る者には大きなバリアーがあります。そのバリアーを乗り越えるためには、よほど優秀でなければなりません。

今、例えば「分子科学研究所」の場合、主な大学の物理化学関係の教授のかなりの数はここにいたことのある方です。ここは全て公募ですから、多くの応募者の中から最も優秀な者を選ぶ。しかも選ぶにあたっては所外の

専門の研究者が半数入った委員会、全く客観的評価に基づいて行われる。こうして選ばれた優秀なスタッフは、よい研究環境の下で研究に専念し、比較的短い期間に顕著な研究業績をあげることができ、その結果として競争に打ち勝って外に出ることができるようになります。このような実績がよく知られているので、また全国から優秀な人が多数応募してくる。その中から一番よい者を選ぶということ循環がとてうまくいっているのです。

その意味で、若い助手とか大学院生を育成して第一線の研究者を輩出してきたという自負を持っております。

大学院の研究指導による研究者の育成ということについては、約十年前に大学共同利用機関を基盤とする、総合研究大学院大学というものができまして、これもその傘下に入っている四つの専攻を持っています。一学年全体の定員は三十二名です。これは博士の後期課程のみですから、他大学の修士課程を卒業した人たちが入ってきて、標準的には三年間それぞれの専攻で研究を行い、そしてドクターを取っていきます。すでに博士の学位を取った者が約二百名です。それらの学生のほとんどは研究職を希望して、九割方が研究者になって活躍しております。

研究に没頭できる

良好な研究環境

これらの学生の研究指導はそれぞれの研究所で行われるのですが、指導体制からいえば



学生数にくらべて教官の数ははるかに多いのが特色です。機構の助手以上の教官数は二百三十名、それに対して学生は一学年三十六、三学年合わせて百八名、教官が約二倍になっています。彼ら学生はたくさんの指導者から学べるわけで、一種の英才教育を受ける、しかも、教官は国際的にも第一級の研究者ばかりです。こういう環境は日本にはめったにありません。そして外国人研究者も多い。ほとんどのセミナーは英語で行われる、ということとで国際色豊かです。普通の大学にはないような環境のもとで学べるわけです。といっても、彼らにとってはものすごく辛いでしょ、しかしそこで鍛えられて、第一線の研究はこうあるべきだと体得し、そして、指導者となっていくのです。

その他に、他大学の大学院生を預っております。以前は委託学生といったのですが、今は特別共同利用研究者と呼んでいます。大学

の大学院から一定期、指導の依頼をうけて受け入れているもので、機構全体で七十名ほどいると思います。こういう研究機関の中で第

—— 学術研究の推進についてのお考えをお聞かせ下さい。

機構長 ここで言う研究はあくまで学術研究、基礎研究に徹しています。応用研究を全くやらないというわけではなく、応用研究に発展するものもいろいろあります。しかしここは基礎研究を重点に置いています。一般に基礎研究は「すぐには役に立たない」と考えられていて、国民の税金を使ってそのような「役に立たない」ものをやるのはどうかというご意見があることは重々承知しております。だから一般の人に対して「役に立たないもの」をなぜやるのかについての説明が重要なことはわれわれは身に染みております。

ご理解願いたいことは、ただ効率性とか経済性とかを追求するのは、本当の意味での学術研究の発展を阻害することになりかねないということなんです。長い人類の歴史のなかでそれはすでに示されています。学術研究というのは、文化をつくることなのです。文化というのは、最初はすぐには役に立たないし、金にもなりません。しかしそれは段々と成長して、人類にとってまた国にとって最も大切なものになるのです。われわれは学術研究を通じて科学文化というものをつくっているのだ

一線の研究に触れて大学に帰ることは、彼らにとってたいへん良い経験になっていると思います。

と考えています。

生まれなければ 何もはじまらない

次の話は元分子科学研究所長の長倉三郎先生に伺った話です。電気で有名なファラデーがファラデーの電気分解の法則を見出した時、イギリスの当時の首相がその実験を見学して「これは何の役にたつのか」と尋ねたそうです。彼は「いや、役にはたさない」と答えました。しかしそれに続けてこういって「今、赤ん坊が生まれた。この子どもは何の役にたつのか。あなたの質問はこれと同じだ」と。「生まれたことが重要なのだ。まず生まなければ何も始まらないのだ。その子どもをいかに育てていくかということは何れわれの課題だが、生まなければ何もはじまらないのだ」。

役にたつから生むとか、生まないとかの問題ではないのです。生むことから始めなければならぬのです。ファラデーの法則はすぐには役に立たなかったけれど、現在ではわれわれの物質文明を完全に「支配」しているのです。何事もそうですが、今までにない全く新しいものができた時には、それが役にた



つかたないかは全く分からないのです。しかし、それが世界をひっくり返すこともあるのです。そういうものを創り出すことが、我々がやるべきことなのです。

予想つかないものが 世界をひっくり返す

すぐに役にたつと予測できるものは、ある意味ではつまらないものなのです。予想というのは既知の知識のもとに行われます。それで予想通りになったということは既知のものを確認したことはなるが、新しい知識が得られたことにはなりません。むしろ、予想がはずれた場合に、今までにない何か重要なものがそこにあることを示すものです。そこで得られた今までのないものが世界をひっくり返すのです。それが無いと、真の前進はないのです。短期間のサイクルで役にたつものばかりを追いかけることは既知の知識に安住することで知識を広めることにはつながらないのです。

この点が、じつは日本が諸外国に責められているところなのです。日本は技術ばかりを追いかけて、何も本質的なものを出してこないではないかと。外国で生まれた基礎知識を利用するばかりではないかと。追いつけ追い越せで役にたつものばかりやってきた「ツケ」がつきつけられているのです。追いつけ追いつけて日本は金持ちにはなったが、むしろ、尊敬を失っているのです。新しい知識を求め、それを探り当ててゆくことが、真に人類の幸福に貢献するもので、そのような行為（行為というのは研究ですが）、研究こそが尊敬を得るのです。

研究に力を入れなければ 国は滅びる

これこそが国が力をいれてやらなければならないことなのです。そうしないと、国は滅びてしまうのです。ちょっと口はほったいようですが、こういうことをやりたいと思っているのです。すぐに役にたつ立たない、そういう価値判断は一般の人には分かりやすいでしょうが、それだけではいけないのです。今は全然役にたたないものでも、十年、五十年、百年たったなら、世の中をひっくり返すものになるかもしれない。それは何千分の一、何万分の一の確率でしょう。しかし、一つ当たれば全部が変わるのです。そういうものを生み出すことは、本当に大変でしょう。しかし我々はそれをやらなければいけないのです。學術研究に携わっているこの研究者はあ

まり役に立つ立たないということは考えていません。彼らを動かしているのは知的欲求という人間としての本能なのです。これこそが人間にとって重要なことなんです。

最近、同じ大学共同利用機関のひとつである国立天文台でスバル望遠鏡による天体観測の映像が放映されました。ああいうものを見て我々は感動しました。役に立つ、立たないということを超越した感動です。これが重要なことです。感動を呼び起こすような学問でないと駄目なのです。純粋科学、學術研究は、そういう感動を引き起こすことができるのです。例えば、ミクロの分子の世界は我々が常識として体験している古典力学が成り立たず、量子力学という、ある意味では、非常識で支配されている不思議な世界です。そういう非常識なものを目にした時、我々は大いに驚き、感動するものです。二十世紀の物質文明はこの驚きと感動でもたらされたのですが、この研究者集団が日夜を問わず一生懸命に研究しているのは、この感動を求めているからです。何で研究しているのか他の人には分からないかもしれないけれど、何か面白いことをやっているらしい。その一生懸命やっているところを一般の方々に見てもらう。これが、われわれの社会に対する一つの説明だろうと思います。

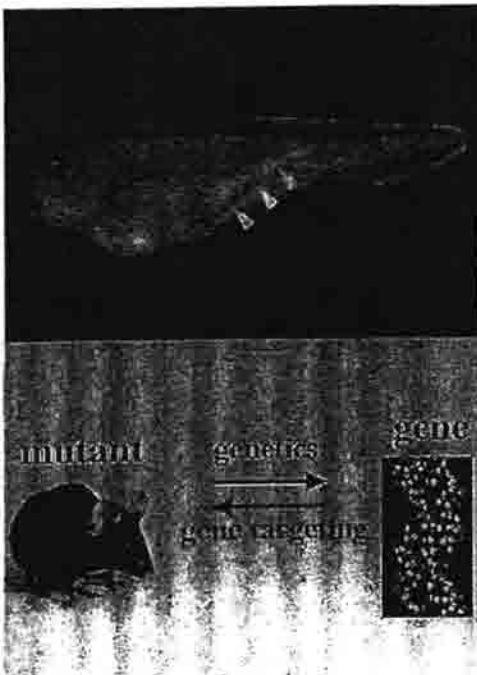
戦略的方法論で 基礎研究

——三研究所と連携して研究展開を図る、

「統合バイオサイエンスセンター」が設置されたとお聞きしていますが、新しい研究の展開についてお聞かせ下さい。

機構長 われわれそれぞれ、分子科学、基礎生物学、生理学ではいろいろな対象について研究しているわけですが、結局一番わからないことの際たるものは、人間という自身を始め動物、植物を含む生きとし生けるものです。なぜこうして生きているのか、これはちょうど宇宙がどうなっているのかというのと同じで、一番不思議なことです。その一番不思議なことについて研究するのは当然なこと、知りたいという欲求を満たす道筋をつくらうというのが、この「統合バイオサイエンスセンター」なのです。

我々がここでやりたいと思っていること、第一は、生物の発生、分化、再生など時間とともに変化する生命現象の機構を明らかにしようということです。基礎生物学研究所、生



背側構造の重複したオタマジャクシ(上)
遺伝子ノックアウトマウスを用いて解明する(下)

協力関係の考え方は先に申したとおりです。三研究所が協力するにあたり、融合ではなく、それぞれの独自性をあくまで探っていく。そしてそれぞれの主張をぶつけあい、競合する場がこの施設である。この意味でも施設の研究者はそれぞれが軸足を置いている研究所のアイデンティティを強く持ち、また意識することが求められる。異質なもののぶつけ合い、互いに学ぶことで新しいバイオサイエンスの芽をつくりたい。

理学研究所がこれまでも取り組んできたことです。第二は科学・技術の研究手法を基盤として情報の感知、伝達、応答などの生体過程を分子レベルで解明し、同時に新しい計測の方法を生み出すことです。それは「分子科学研究所」の役目です。

第三は自然界に放出された化学物質等が生体のメカニズムに大きな影響を及ぼす、いわゆる生命環境の問題に取り組むことです。以上の三つの課題を中心に三研究所が協力して研究を展開していくことにしています。

当面は三研究所にそれぞれ軸足を置いた二十数名の教官でスタートすることにしておりまして、施設は新しいキャンパスに設立することになっています。

この施設は専門の異なる三研究所が場所を同じくしてバイオ・サイエンスの共通課題に取り組むというこの機構としては初めての試みであり、是非成功させたいと考えています。

この意味で統合バイオサイエンスセンターは、ただ単なる協力関係を重視するのではなく、異質なものの間の戦いの場と考えています。これは悪くすれば玉碎ということもあり得るが、あえて危険を冒してもこの新しい試みをやることが必要と考えています。そして最後は環境ですね。世のなかにたくさん分子がある。いま環境分子とよばれていますが、たくさん分子のなかにごくわずかにあり、ほんの少量でも、非常に生態に大きな影響をもたらすようなものがあり、問題になっております。こういう問題を生物学専門家ばかりでなく、分子科学の専門家と一緒に取り組めば、新しい点が出てくる。だから今、そういう三つの柱をたてて、一つは発生分化再生という時系列現象、もう一つは新しい方法論、われわれは戦略的方法論と呼んでいます、それから環境。

五年をめどに評価 人事交流

そのなかで、いろいろな研究課題をやりますが、当初は二十数名で従事していましたが、新しいキャンパスでこれを展開する予定であります。研究課題については五年をめどに結果について評価をおこない、ものによっては継続し、場合によっては課題の変更をす。と同時に「統合バイオサイエンスセンター」で研究する人がまた研究所の方に戻っていく、という人事交流を密にやろうと考えております。

雑 感

伊 藤 光 男

分子研は創設以来 18 年を経過し、いまや分子科学研究の重要な国際的拠点としての地位を確立するに至った。本年 4 月に井口前所長のあとをうけて所長に就任したさい、多くの外国の分子科学者からお祝いの手紙を頂いたが、それは口をそろえて今日までの分子研の業績を称え、今後指導的役割を果たすよう期待するものであった。これはあながちお世辞ばかりではないようで、分子研の研究者が色んな国際会議に招待講演者として選ばれる機会が多いことからもうなずける。18 年という比較的短い期間にこのような高い地位を得るに至ったのは、各方面のご支援のもとで分子研の研究者が全力を尽くして頑張った結果であると思う。研究棟の灯が夜中までこうこうとしていることで象徴されるように、まさに hard work の見本のようなもので、私は外にいるとき分子研は監獄だと評したこともある。日本人の勤勉さ、器用さ、集団としての強さなどが今日の経済大国を築きあげたように、分子研は実に驚くべきスピードで一流の研究所にのしあがり分子科学の多くの分野で世界と競っている。分子研からでる論文の質の高さは Science 誌にのった citation index からもうかがえる。

分子研の研究水準が非常に高いことに疑いをはさむ余地はないが、一方、ユニークさ、創造性、意外性といった観点から見たときどうであろうか。分子研から真に新しい何かが生まれたかという間にたいして正直のところ躊躇せざるを得ない。日本の基礎研究が外国にくらべて創造性、獨創性に欠けることはしばしば指摘されその原因が色々と論じられているが、私はゆとりや遊びのなさも一つの原因ではないかと思う。私事で恐縮であるが、私は下手な絵やスケッチを画くことを趣味としている。そして絵やスケッチを楽しんでいるとき、研究面で思い悩んでいたことにアーそうだったのかと気づくことが再々あった。これは絵にかぎらず誰もが経験することではないだろうか。われわれは何もかも忘れて遊んでいるつもりでも、抱えている問題を考え続けているのであって、遊びという異質のもので触発され意外な展開を見るのではなかろうか。昔からよく学びよく遊べというのはまさに至言だと思う。遊びを大いに奨励するのは所長としての立場からはばかれるが、すくなくとも適当な遊びはぜひ必要だと思っている。

もう一つここで言っておきたいのは、真に創造的な研究は個人の自由な発想から生まれるということである。最近、グループ研究やプロジェクト研究がさかんで、それはそれなりに大きな成果を収めその分野のレベルアップに大いに貢献していることに間違いはない。しかしこれから新

しいものが生まれまた意外な方向に発展したという例は案外すくないように思う。グループ研究やプロジェクト研究が個人の自由な発想を制約していることがないであろうか。分子研の重要な使命の一つが共同研究であろうことを考えると、このことは十分に銘記されなければならない。個人の発想を尊重しあうことから創造的な共同研究が生まれると信ずる。

最後に、これは私の持論であってまたかと言われると思うが、いい研究にたいして率直にいいと言わなければならないということである。これは全く当り前のことであるが、残念ながら日本ではそうではないといわざるをえない。いいとほめることで自分の権威が侵されると思っているようにみえるのである。この点では外国と大きな違いを感じている。いいものをいいと言わない風潮が、わが国で芽がでた多くの創造的な研究を潰してきたのではないだろうか。点検、評価が叫ばれている今日、他人の研究にたいしても正当な評価をあたえこれを明言すべきだと思う。

オールドボーイの繰り言

伊 藤 光 男

馬鹿のひとつ覚えのように同じことを繰り返す失礼をお許し願います。昨年の分子研レターズでよいものはよいと誉めようではないかということを書きました。最近、外国での国際会議に出席して、もう一度言っておきたいと思うようになりました。

私は英語ができないため自分からすすんで外国にでかけ研究を発表するということはあまりしませんでした。しかし少ない経験のなかでも、外国で話すほうが国内よりは確かな手応えを感じ、また充実感を覚えたものです。これは私にかぎらず多くの方が感じていることではないでしょうか。私のように英語では言いたいことの半分もいえず、また相手の言う事の半分も理解できないものにとって日本語でやることのできる国内での発表のほうがはるかに気持ちがいいはずですが。しかし自分ではよい発表だったと思っても国内の学会ではなにか満たされないものが残ったものです。外国、とくにアメリカでの学会でよく見かけるのですが、よい発表をした講演者に講演後に多くの人が声をかけ握手を求める場面を見ます。これは見ているだけでも気持ちのいいものであり、また本人にとっては大変嬉しいことに違いありません。日本では握手する風習はないので（最近ではそうでもないが）このような目だった場面におめにかかれぬのかもしれませんが。しかし感じたことを素直に伝えるということはあまりないように思います。

皆で誉めてやるということは、とくに若い者に計り知れない力を与えるものです。アメリカでは、こうして皆でよい研究をした若い研究者を勇気づけ育てることが期せずして行われているように思います。われわれオールドボーイの間で、よい研究者が育っていないということがしばしば話題になります。しかしよく考えてみるとこれはわれわれオールドボーイの責任だと思えます。学会等でよい研究発表をしたよその研究室の若者に素直に賞賛を表したでしょうか？ よいと心のなかで思っても小さいことにこだわり、けちをつけなかったでしょうか？ そのようなわれわれのためらいが彼らを discourage し研究に対する意欲を減退させなかったでしょうか？ そしてよいものをよいとはっきりと言わなかったために、折角出かかった新しい芽をつんでしまったのではないのでしょうか？

やたらに誉めることは若者を甘やかせ増長させるという見方もあります。また誉めても、それは外交辞令ととられる場合が多く、誰もまともに受け取らないから、そんな無駄なことはしない方がよいという意見もあります。たしかにお義理で誉めることもあります、義理でも誉める方

が無視するよりはお互いに気分がよいのではないのでしょうか。

誉めるばかりが能でなく、場合によっては厳しい態度で臨むことも必要であることは勿論です。しかし、人によっては自分の優位性を顕示するために他にたいして厳しく臨むということがままあるように見受けられます。このような人にとっては誉めることが自分の優位性を否定することになりかねないので、口が裂けても誉めないことになります。残念ながら、わが国の大学教授やシニアの研究者にこの手の人が多い気がします。誉めて得をすることがあっても、損することは絶対にはないのです。われわれオールドボーイも、若い時に大先生、先輩からいただいた励ましやお誉めの言葉がどんなに嬉しかったか、またそれが“がんばろうー”という気持ちをかきたてたことを思い起こしたいものです。今度はわれわれの番です。よいものにたいしては、出し惜しみしないで大いに誉め、若い者に大いにやる気をおこさせてやろうではありませんか。よいものをよいとはっきり言うことによって、本当によいものが育っていくのではないかと思います。よい研究を盛り立てるには金その他の手当も必要ですが、一番必要なのは研究意欲であり、これをかりたてるかどうかはシニアの研究者の言動にかかっている場合が多いことを自覚したいと思います。アメリカでの学会で、見ず知らずの若い研究者に声をかけ very good work と誉めている大先生をみるにつけ、人を育てるということはこういうことだと痛感した次第です。

雑
感

分子研レターズの巻頭言は格調の高いものでなければならないし、ましてかって所長をつとめた者は分子研、分子科学、ひいては日本の学術研究について一家言をもち、それを披瀝することが期待されるのでしょう。しかし、私は確固たる哲学や信念をもちあわせていませんし、自分の無能を棚にあげて人様に教訓めいた事を言える柄でもありません。それにしても、私のような者がよくも所長を務まったものと感心している次第です。これもひとえに皆さんに助けていただいたお蔭と感謝しています。

考えてみますと、この6年間、所長として分子研に貢献したという実感は全くありません。分子研は優秀でしかも意欲的な研究者で溢れており、黙っていても彼らの研究活動で分子研の株が上がってゆく構図ができています。分子研の研究にたいして批判的な声も耳にしますが、彼らの自由奔放さこそが新しいものを産み出す原動力であり、黙って見ているのが所長の勤めと思えました。要するに所長は何もしなくてよいわけで、ある意味では一番楽な仕事だったと思えます。

所長をやめる時には、分子研に私の存在の痕跡を一切残すまいと常々思っていました。心配しなくても何も残っていないようです。ただ一つこだわったのが“一銭洋食”です。分子研でのいろいろな集まり、花火観賞会、助手会、大学院生会、技官や事務官との飲み会、多くの研究室のコンパ等に呼ばれるたびに“一銭洋食”の普及につとめ、その結果かなりの若い連中に免許皆伝を与えることができるようになり、この“一銭洋食”だけは分子研にのこるかなーとひそかに喜んでいました。ところが、所長退任前のあるコンパで一番弟子が私のために習熟した“一銭洋食”の腕前を披露してくれた時、最も重要な材料を忘れていたのを発見し、結局、これも残らないだろうなーと思った次第です。このようなわけで、私自身は分子研に何も残せませんでした。私は分子研からたくさんのもを頂いたと心から感謝しています。

最後に少し真面目な話ですが、現在、独立行政法人化の問題が分子研のような大学共同利用研究機関、ひいては国立大学にも及ぼうとしています。これについて論じるつもりはありませんが、ある意味で日本の学術研究、大学教育が未曾有の危機に直面していると言っても過言ではないと思います。しかし、不思議なのは、これほどの大きな問題に対して、大学人の動きがほとんど無いことです。私は、独法化そのものより大学人の無反応、無表情のほうが怖い気がしています。

とりとめもないことを書きました。新所長のもとの分子研のますますの発展を祈っています。

伊
藤
光
男